

2015 JOPT シンポジウム

## 会話×コミュニケーション×評価

日時：2015.3.26 13:00～17:00

---

場所：筑波大学東京キャンパス

---

主催：基盤研究(A) 日本語会話能力テストの研究と開発：国内外の教育環境及び多文化地域社会を対象に

---

JOPT(Japanese Oral Proficiency Test) 科研グループ

# プログラム

12:30～13:00	受付	
13:00～13:10	趣旨説明	鎌田修（南山大学, JOPT 代表）
13:10～14:45	講演	柳瀬陽介（広島大学）  テストとは受験者と試験者を共に試すもの-言語熟達度評価の歴史-共同体性について-
14:45～15:00	休憩	司会：嶋田和子
15:00～17:00	<p>パネルセッション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・野口裕之（名古屋大学）：言語テストの世界的動向とスピーキング・テスト</li> <li>・鎌田修（南山大学）：OPI（Oral Proficiency Interview）</li> <li>・菅長理恵（東京外国語大学）：DLA（Dialogic Language Assessment）「話す」</li> <li>・西川寛之（明海大学）：JOPT・テスト</li> </ul>	

演題： テストとは受験者と試験者を共に試すもの 一言語熟達度評価の歴史・共同体性について

広島大学教育学研究科教授（英語文化教育学講座）。主に、コミュニケーション能力や英語教師の成長などのテーマで研究を進めています。ウィトゲンシュタインやアレントやルーマンなどの哲学的概念枠組みを主に使い、英語教育現場の豊かな知恵をできるだけ言語化することを試みています。具体的な実践を抽象的な用語で再理解し、実践をより根源的に変革し多面的に展開できるように努めています。教育・研究上の情報は、できるだけブログで公開するようにしています。

### 要旨

この講演では、「わかる」・「できる」・「会話テスト」の三つのトピックを原理的に検討します。「わかる」とは何かという問いは、「意味」とは何かという問いと直結します。講演では神経科学のA. ダマシオと哲学のJ. デューイに基づき、意味の身体性と生活世界性を確認した上で、哲学のJ.L. オースティンと社会学のN. ルーマンの議論を翻案して、表の意味・裏の意味・全体的意味という用語でコミュニケーションのプロセスを説明します。説明により、意味のどの側面においても参加者それぞれの自己参照（自己準拠）が関わることを明らかにし、「できる」の検討につなげます。「できる」という概念は、そのまま能力概念につながりますが、講演では言語学・言語哲学のチョムスキー、デイヴィッドソン、ハイムズ、ヤーコブソンのコミュニケーション論を概括した上で、コミュニケーション能力は個人還元も標準化もできないことを論じます。「会話テスト」の検討においては、言語再生（language reproduction）と言語使用（language use）の区別をした上で、会話のテストは言語使用のテストであるべきと論じます。会話での言語使用の様子によって言語習得の次第を判定する会話テストは、その言語の歴史・共同体性に基づく観察といえますが、その観察をさらに観察（二次観察）することより、判定者がその言語の歴史・共同体性をどのようなものとしてみなし・みなそうとしているかが露わになります。テストという観察を、二次観察することにより、テストという制度的権力創成の試みは、より「客観性」を高め、権力が民主化すると論じます。

短い字数で講演内容を要約すれば、このように抽象的でやや難解な表現になってしまいますが、講演ではできるだけわかりやすく、具体的にお話するつもりです。当日はスライドを投影しますが、印刷しますと大部になりますので、会場で印刷媒体で配布することはありません。講演当日までには、ブログ

(<http://yanaseyosuke.blogspot.jp/>) にスライドをアップロードしておく予定なので、講演前あるいは講演中にダウンロードしていただければ幸いです。

### 会話能力テストを語る

## 言語テストの世界的動向とスピーキング・テスト

野口 裕之 (名古屋大学)

外国語教育や外国語学習の中で、言語テストは学習者の言語能力を評価するために重要な役割を担っている。言語テストの結果で認定された外国語能力水準の証明は受験者個人にとって極めて重要な決定場面で利用されることが多くなっている。いわゆる hi-stakes test である。

まず、世界の公的な大規模言語テストの例をスピーキング能力測定を中心に概観する。

大規模言語テストの最近の傾向は、1) 言語に関する知識量ではなく、言語運用能力を測定する、2) 項目応答理論をベースにした得点化システムを採用する、3) 測定結果の解釈基準として「～ができる」という Can-do statements を用意する、4) CEFR との関連づけを行なう、などの特徴がある。このような大きな流れはあるが、具体的なテスト仕様の詳細に関しては、各開発機関の考え方が反映している。これらの特徴について取り上げる。

次に、そのような流れの中で、大きな役割を果たしている「パフォーマンス測定」について概観する。パフォーマンス測定では受験者の回(解)答を訓練された評価者(評定者)が得点化するが、この点で客観式のテストと大きく異なっている。すなわち、測定の信頼性の程度を評価する際に「評価者」に関する信頼性をどのように取り扱うかということが重要な問題になる。パフォーマンス測定の特徴を概観した後で、評価者の信頼性をどのようにとらえるのかについて触れ、さらに評価者間での「厳しさ(severity)の違い」を組み込んだ分析モデル(多相ラッシュ・モデル)について簡潔にその意味と特徴を示す。今回は測定の信頼性の側面を取り上げるが、スピーキング・テストなどのパフォーマンスを測定するテストに於いても、通常の客観式のテストと同様に妥当性を検証する過程も重要であることは言を俟たない。

さらに、最近話題になることの多い CEFR の開発に多相ラッシュ・モデルが利用されていることに触れて、測定モデルが空理空論ではなく現実の外国語教育の発展に大きな貢献をしていることを示す。

## OPI (Oral Proficiency Interview)

鎌田 修 (南山大学)

OPIとは ACTFL (全米外国語教育協会)が半世紀にわたって開発した面接式外国語口頭能力測定を意味する。最大 30 分という時間的制限の中でテストは被験者と様々な話題について可能な限り自然な会話を行い、被験者がこれ以上は話せないという上限とこれ以下のことについて話しても意味がないという下限を必要な限りの話題(タスク)を与え、その結果を見て、最終的にもっとも安定した能力レベルを探し出す。面接は録音し、後ほど、聞き直し、ACTFL Proficiency Guidelines (ACTFL 運用能力評価基準、以下、ガイドライン)に照らし合わせ、Distinguished (卓越級)、Superior (超級)、Advanced-High/Mid/Low (上級-上/中/下)、Intermediate-High/Mid/Low (中級-上/中/下)、Novice-High/Mid/Low (初心者級-上/中/下)、のどのレベルに位置するかを判定する。

ガイドラインは口頭能力とは、当該の話者が外国語を使用して、(1)どのような難易度の会話活動そのもの(「総合的タスク/機能」)を、(2)どのような難易度の「場面」において、どのような難易度の「内容」を伴い、(3)どのような「正確さ」「被理解度」と、(4)どのような言語形態(「テキストタイプ」)として遂行できるか、という4つの構成要素の表出の具合で評価できると考える。テストは被験者自身を基軸に、「いま、ここで、あなたはどのようなことが、どう話せるか」という言語運用能力(proficiency)の測定に迫る。また、面接以外の言語場面を越えるため途中ロールプレイも課す。

物事が予測通り繰り返される日常的活動が遂行できる能力を「中級」とし、それを越える非日常的な活動が行えるレベルを「上級」とする。中級に至るまでを「初心者レベル」、また、非日常的であるだけでなく抽象性が高く、さらに、複雑な社会的位相を持つ活動が行えるレベルを「超級」「卓越級」とする。このように現実生活における言語の使用能力をプロフィシエンシーとし、それは、どのような教授法、どのような学習環境といった学習背景を超えた汎言語的な言語能力であるとす。

以上、本パネルでは、事例を紹介することにより、OPI の構造、評価の仕方、ガイドラインの構成についてそれらの概略をお見せする。

公立の小中学校に在籍する日本語指導が必要な児童生徒の増加に伴い、教育の充実に向けた様々な取り組みが行われている。その一つが、「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」の開発・公開である。

学校教育現場において、児童生徒の日本語力が、学校生活を送る上で、また、授業を受け学習活動に参加する上で十分であるのかどうか、不足しているのはどのような点であるかを把握することは急務である。ただし、成人の外国語能力の測定とは異なり、母語も日本語もともに発達途上である年少者の言語力測定においては、言語を操る力と同時に認知力の発達段階を見極める必要があり、評価や伸びの予測においては、母語の状況、年齢、入国年齢、滞日年数等の様々な要因を考慮しなければならない。

DLA の全体は、「導入会話・語彙力測定」を入口として、「話す」「読む」「書く」「聴く(対話ではなくまとまった談話の聞き取り)」の 4 技能からなっている。児童生徒の現状に合わせて、どのアセスメントを実施するかを決め、それ以上先に進むのが困難な場合はそこまで終了する。すべての技能において対話による測定を行うが、「読む」「書く」「聴く」ではある程度文字の習得が進んだ児童生徒が対象となる。いわゆる「会話能力テスト」として設定されているのは「話す」である。

DLA においては、カミンズの説に基づき、Conversational Fluency=CF(会話の流暢度)・

Discrete Language Skills=DLS(弁別的言語能力)・Academic Language Proficiency=ALP(教科学習言語能力)の 3 つの側面から児童生徒の言語能力を測ることを企図している。この 3 つは場面依存度と認知力必要度の連続性の中において捉えられるものである。「話す」では、3 種 14 枚の絵カードを使い、場面依存度の高いものから低いものへ、認知力必要度の低いものから高いものへと段階的に場面設定を行うことで、言語力・認知力の総合的な力を測る。

DLA の実施に際しては時間の確保とテストのトレーニングが必要であり、筆記テストに比して手間がかかるが、アセスメントを録画し、担当教員間でシェアすることにより、日常生活や普段の授業内では気づかない児童生徒の潜在的な力を見ることができ、指導に役立つ手ごたえが得られる。

DLA のもう一つの特徴は、アセスメントの実施過程がそのまま、児童生徒の持つ言語力・認知力を引き出し、活性化させる学びの機会となっていることである。児童生徒の言語力を把握できるという指導者側のメリットと同時に、児童生徒にとっても、自らの学習意欲を高め、「できる」ことを増やせるというメリットがあるアセスメントなのである。

Japanese Oral proficiency Test (JOPT)の開発では、口頭表現ベースの会話を対象としたテストで、OPIと比較して短い時間で終了し、かつ、テストの能力に対する依存の少ないものを目指す。また、このテストが学習者の学びをサポートできること期待する。

**【 JOPT の特徴 】**

1. インタビュー形式による試験の実施
2. 随時受験が可能で、15分程度の短時間で終了する小規模の試験
3. インタビュアーの出題能力への依存が小さい試験(OPIとの比較)
4. 同一の評価軸のもと、複数の出題領域を設定し、領域内における言語力評価を行う試験。
5. 各領域内でのレベルを示すと同時に同一の学習進度を示す評価。

**【出題領域:試験の3つの領域 (A,B,C)】**

受験者の産出する音声データをもとに、日本語運用力の評価を行う試験である。

日本語使用場面を3つの領域に分け、それぞれの領域における日本語運用力の評価を行う試験である。

A領域:Academic 主な対象者: 学生

B領域:Business 主な対象者: ビジネスパークソン

C領域:Community 主な対象者: 定住者

**【評価】**

作題に際し考慮する評価ポイントは、タスク遂行に関わる言語能力を対象とする。

四技能で言う「話す」に加え、「聞く」、「読む」を一部含む。「聞く」については、インタビュアーの出題に対する反応から、「話す」「聞く」という音声でのやりとりに関する能力を測定する。「読む」については、特に領域A,Bにおいて、グラフなどを含む資料を読み取りそれをもとにした会話を評価対象とする。この他、写真やイラストを使用した出題もあり、社会的もしくは文化的な知識に基づく発話を評価対象とする試験である。

評価基準は、3つの尺度から言語運用力の難易度を設定し、3つの尺度をもとにした立体的な評価を行う。3つの尺度とは、(1)産出テキスト、(2)タスクの複雑さ、(3)タスクの出現頻度である。

**【テストの形式】**

テスト形式は、対面式のインタビューにより行う。

出題の構成は、A,B,Cそれぞれの領域に関して、測定対象となるレベルを3つ想定する。いわゆる初級をSTEP1、中級をSTEP2、上級をSTEP3と呼ぶ。STEP1は、一問一答式で独立した箇所、受験者が回答する準備をするウォームアップの役割も担う。

STEP2と3は原則として同一もしくは類似したテーマで、連続して出題される。また、イラストやグラフ、場合によっては文書などの資料を読んだ上での発話を求める出題とする。